

# ☆☆～あれ地の開拓に力をつくした岡本甚左衛門とその子孫～

小学生 版

浜田市金城町七条に、田畑が一面に広がっている新開という台地があります。新開集会所の裏に生垣に囲まれた石碑があり、「開原院」と文字が彫られています。

この石碑こそ、この地の開拓に一生をささげた岡本甚左衛門をたたえた碑です。岡本甚左衛門とその子新右衛門・孫の与一郎が作った堤(ため池)や水路の中には、今でも農業用に使われているものがあります。甚左衛門が亡くなったのちに完成した大堤は、人々から「甚左衛門堤」とよばれ、地域のために力をつくした甚左衛門の名前と功績は、永遠に語り継がれています。



現在の「新開」

## 1【甚左衛門 生まれる】

大佐スキー場で広島県へとつながる国道 186 号線を、浜田駅から 10 キロほど進んだあたりが、金城町雲城です。浜田市役所のそばを流れる浜田川の上流になります。

江戸時代、雲城のうち、七条原(のちの新開)・若林・青原は七条村といい、浜田藩に属していました。甚左衛門は、七条村の庄屋を代々つとめていた岡本家に生まれ、1796 年に父のあとをついで庄屋になりました。江戸時代の終わりのことです。

当時この地域は田畑が少なく、人々は生活に困っていました。また、米はお金がわりとなる大切な作物でした。甚左衛門は七条原に目をつけました。七条原は、海拔230mの高地で、木が生いしげり、クマザサやイヌツゲなどが生えていたあれ地でした。甚左衛門は、水さえあればここは広い田畑となり多くの人が住めると考え、堤(ため池)をどこに作ろうか見て歩き、浜田藩に開拓をたのみました。けれども藩だのみでは開拓が進まないことがわかり、甚左衛門は、自分の財産をつぎこんで、七条原を開拓しようと決心しました。1819 年のことです。

## 2【甚左衛門、村をつくる】

最初に甚左衛門が考えたのが、飲み水を得ることです。井戸を掘っても水が出なかったので、まずため池を作り、近くの竹やぶに井戸を掘ることにしました。木を切って、クワで土を掘り、掘った土をモッコで運んで、のべ 860 人の力で「宮下大堤(現在の妙見堤)」を完成させました。堤の水が地下水となり、井戸からはきれいな水が出ました。これでここに人が住める見通しがついたのです。

甚左衛門は、住まいも七条原に移して、本格的に開拓を始めます。農業用水用の堤や水路をいくつも作っていました。1824 年から 1 年間かかって のべ 1685 人の力でつくった「たたら谷堤(現在の長迫堤)」は、25m プール 35 個分の大きさでした。農家だけでなく鍛冶屋なども住まわせ、今までほとんど家がなかった七条原は、35戸、178 人が住むムラとなり、この地は、「新開所(しんがいしょ)」とよばれるようになりました。(平成20年現在、24haの農地が広がり、57世帯201人がここで生活しています。)

1774(安永3)	甚左衛門 青原で生まれる。
1796(寛政8)	七条村の庄屋になる(23歳)
1819(文政2)	七条原の開拓を願い出る。 開拓許可が下りる。(46歳)
1820(文政3)	宮下大堤など3つの堤が完成。(47歳)
1821(文政4)	七条原に移住。原中大堤を作り始める。
1823(文政6)	広草田大堤(新堤)作り始める。(50歳)
1824(文政7)	原中大堤完成。たたら谷大堤作り始める。 富くじを発売(51歳)
1825(文政8)	たたら谷大堤完成(52歳)
1827(文政10)	開拓地が新開所と名付けられる。 35戸 178人が暮らす
1834(天保5)	新堤の工事再開を願い出る。工事開始(甚61歳)
1835(天保6)	大ききん。浜田藩 密貿易発覚。たたら・富くじ禁止される 新堤の工事中断 人口が激減(100人ほどに)
1839(天保10)	新右衛門 七条村庄屋になる。 (甚66歳 新16歳)
1842(天保13)	新開所の開拓、一通り完成。 甚左衛門死亡(甚69歳 新19歳)
1856(安政3)	新右衛門 広草田堤の工事を再開・完成 (新33歳)
1858(安政5)	広草田堤の土手をかさあげする。
1866(慶応2)	与一郎 新開所の庄屋になる。 (新43歳 与23歳)
1867(慶応3)	新右衛門 新開に甚左衛門の石碑を建てる。(新44歳)
1867(明治元)	江戸から明治に
1871(明治4)	新右衛門、与一郎、導入水路工事を再開する。(新48歳 与28歳)
1872(明治5)	浜田大地震 導入水路 完成(新49歳 与29歳)
1873(明治6)	新開は 戸数34戸、人口130人
2008(平成19)	新開は 51世帯、人口201人

### 3【甚左衛門の苦労続く】

けれども、まだ農業用水は必要です。水が不足して作物を植えられない田畑が出てきたのです。そこで甚左衛門は、より大きな「広草田大堤」を作り、あわせて、堤の水がなくなならないよう浜田川からの水路（導入水路）を作ろうと考えました。甚左衛門が特に苦労したのが、開拓のための資金集めです。当時の工事には多くの人手が必要で、多額の費用がかかります。そこで考えたのが「富くじ（今の宝くじのようなもの）」の発行です。藩の許しをもらい、月一回の富くじができるようになりました。また、たたら製鉄を行ったり牛馬市を開くなど、知恵と工夫で資金を集めました。それでも資金が足らず、大堤の工事は中断します。そのうち、密貿易事件で、藩主が国替えになり（1836年）、その混乱で、藩に預けていたお金がもどってこなくなりました。また、大きなききん（作物が育たないこと）が起こったり、富くじやたたら製鉄が禁止されたりして、新開所の人口は減っていきます。そのような中でも、人々は田畑の開拓を進め、1842年、七条原の開拓は「広草田大堤」と「導入水路」をのぞいてひとまず完成したのです。甚左衛門が開拓を決意して23年の月日が流れていました。



甚左衛門堤

【甚左衛門らが作ったおもな堤】

昔の名	今の名	面積	完成年
広草田大堤	甚左衛門堤	21,818 m <sup>2</sup>	1856
たたら谷堤	長迫堤	13,884 m <sup>2</sup>	1825
原中大堤	妙見道東堤 (今は水がない)	6,942 m <sup>2</sup>	1820
宮下大堤	妙見脇堤	2,459 m <sup>2</sup>	1820
原中小堤	今はない	(535) m <sup>2</sup>	1820

#### 【水路工事に使われた土木技術】

**掛樋**…溝が掘れない岩の部分に、竹や木で樋をつくる。

**横穴**…山の中腹に穴を開けて水を流す。高さ1m 幅80cmぐらい。

**水揚埋樋**…水の圧力を利用して、低いところを通してまた高いところへと水を流す。

**釣り溝**…土手を築いてその上に水路を作る

### 4【甚左衛門の願いを新右衛門や与一郎が受け継ぐ】

1842年、甚左衛門は、大堤の完成を見ることなく、69歳の生涯をとじました。甚左衛門の長男の新右衛門は、庄屋の役目をりっぱに果たせる年になると、父の決意を思い出し、1856年 広草田大堤の工事を再開し、完成させます。その後大堤は、1858年にかさ上げされて、25m プール54個分の水をためる堤として、まわりの田畑をうるおすようになりました。

月日は流れ、新たに新開所の庄屋となった新右衛門の子、与一郎は、父新右衛門とともに、大堤への導入水路の完成をめざします。浜田川はずっと低いところを流れているので、近くからは水は取れません。甚左衛門の計画・測量をもとに、上流の坂松谷から堤まで長さ3kmの水路を作ることになりました。地形に応じて「掛樋」「横穴」「水揚埋樋」「釣り溝」の土木技術を使った本格的なものです。当時は測量機器もなかったので、夜を待って提灯の火を使って高低を測りました。この導入水路は、1871年から作り始め、1872年に完成しました。（甚左衛門の決意から、大堤は33年目、導入水路は49年目に完成したことになります。）

### 5【甚左衛門の心意気は永遠に】

1867年、甚左衛門に対して、お寺から「開原院」という名がおくられました。新右衛門は、その名を刻んだ石碑を、新開の屋敷跡に建てました。新開の住民は、今も石碑を大切に守っています。現在も新開に水を送り続けている大堤（正式名「新堤」）を人々は親しみをこめて「甚左衛門堤」と呼んでいます。1982年には創作太鼓「甚左衛門太鼓」も作られました。人々は今でも甚左衛門たちの努力を忘れていないのです。

さて、甚左衛門はなぜここまで開拓に力を注いだのでしょうか。それは、ひいおじいさんの砂右衛門と関係があります。砂右衛門が庄屋の時、農地の面積が違うと強く訴えて、藩に調べ直してもらい年貢を減らしてもらいました。そのため砂右衛門は、のちに神社が建てられるほど農民からしたわれしました。しかし本人は、おさめる年貢を減らしてしまい、藩にもうしわけないとずっと思っていたそうです。その思いを甚左衛門が受け継ぎ、農地を少しでも増やすことに心をくだいたのです。

甚左衛門たち以外にも、郷土の発展に力を注いだ人はたくさんいます。私たちの今の暮らしは、実は、昔の人のたいへんな努力の上に成り立っていることを、私たちは忘れてはならないと思います。

導入水路のあらまし  
総延長3km（設計では5km）  
坂松谷から甚左衛門堤まで  
掛樋3カ所  
横穴3カ所  
（58m、145m、110m）  
水揚埋樋 1カ所（108m）



甚左衛門をたたえた石碑  
（「開原院」）